

伊勢神宮崇敬会だより

# みもすそ

## 特集 伊勢街道

お伊勢さんの歳時記

4月3日 神武天皇祭遙拝

4月4日 神田下種祭

4月16日 大麻用材伐始祭

4月26日 植樹祭

4月28日 春季神楽祭

4月30日 大祓

5月1日 神御衣奉織始祭

5月13日 神御衣奉織鎮謝祭

5月14日 風日祈祭

5月31日 神御衣祭

6月1日 大祓

6月15日 御酒殿祭

6月25日 月次祭

6月30日 大祓

第86号  
平成30年春

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、雲出川の小野古江渡跡に立つ常夜燈。

# 特集 伊勢街道

江戸時代、東海道に次いで交通量が多く  
津々浦々からの旅人とともに  
物資や情報、文化が行き交った「伊勢街道」。  
日永の追分で東海道から分岐し  
伊勢湾沿いを南下してお伊勢さんへ至る  
約70kmの参宮街道をご案内します。



七里の渡跡で、「この鳥居は神宮さんから来たんや」。地元の方が誇らしげに教えてくれました。

長い年月を経た史跡や道標、常夜燈が、お伊勢さんをめざす旅人を見守る。  
江戸時代、おかげ年には年間数百万もの人々が押し寄せた伊勢参り。数ある参宮道のうち、メインルートとなったのが、関東方面に通じる伊勢街道と、関西からの旅人を迎えた伊勢本街道です。  
本紙では二回にわけて、二つの旧街道を集めます。初回は、東海道と連結し、東海道に次ぐ交通量を誇った伊勢街道です。

## 日永の追分から神戸へ

その昔、江戸日本橋から東海道を歩いた旅人は、熱田の宮から海路(七里の渡)で木曾三川を越えて桑名へ。「伊勢国」の鳥居に迎えられて伊勢国入りを実感しました。この大鳥居は神宮式年遷宮毎に建て替えられる習わしで、現在の鳥居は豊受大神宮(外宮)御正殿の棟持柱、宇治橋西詰鳥居を経て、三たびの役割を果たしています。  
ここから天下の公道東海道を二〇km余り南下した日永の追分(四日市市)が伊勢街道の起点です。  
追分の鳥居は安永三年(1774)、この道をよく利用していた商人が、東海道との分岐点に鳥居がないのを遺憾とし、有志を募って敷地を購入し建てたのがはじまり。

この鳥居も神宮式年遷宮を契機に建て替えられ、現在の鳥居は皇大神宮(内宮)別宮・伊雑宮の古材をいただいたもの。敷地内には飲用できる湧き水が引かれており、街道のオアシスといった雰囲気。お茶やコーヒ  
一用にと、近在の人々が汲みに訪れます。  
伊勢街道はここから県道四日市鈴鹿線を南下し、鈴鹿川を渡ったところで堤防沿いに進み、常夜燈を目印に左へ折れます。とたんに道幅が狭くなり、ゆるやかに蛇行や起伏はじめて街道らしくなってきました。  
神戸の見附(鈴鹿市)は、通行人を監視する番所が置かれていたところ。夜間には木戸を閉じて通行を禁止、町の治安を守っていました。道の両側には、積み上げられた石垣が往時のまま残されています。

近くの老舗旅館「加美亭」さんでお話をうかがうと、「今もこのあたりで旅館を営業しているのは当館くらいですが、昔は旅館や遊郭が並ぶ賑やかな通りだったと祖母から聞かれました」と話してくれました。  
鈴鹿市役所の周辺には老舗の商店や立派な山門を構える寺が多く、神戸藩の城下町として賑やかだった頃を偲ばせます。



3



1



2

1/伊勢街道の起点「日永の追分」。道標の国道1号線側には「右京大坂道」、鈴鹿へ向う県道側には「左いせ参宮道」と刻まれている。  
2/老舗旅館や平入りの民家が並ぶ神戸見附跡。道の両側に石垣が残り、ここに木戸を立てて夜間は通行止めとした。  
3/白子地区は曲がり角が多いため、旅人が迷わぬようこの家(和田家)の当主が石標を建てた。何度も倒れては建て替えられている。



3



# 伊勢街道地図

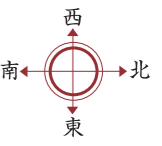
巡礼道との追分に立つ道標と常夜燈。



伊勢別街道との追分に位置する江戸橋の常夜燈。



下弁財町の辻に面して並ぶ閻魔堂と市杵島姫神社。



鼓ヶ浦の道標。



浅草、大須と並んで日本三大観音の一つとされる津観音。門前町は大門商店街として発展した。



元伊勢・藤方片樋宮と比定される加良比乃神社。内宮外幣殿の古材を受けて造営されている。



生誕二百年を機に修復公開された松浦武四郎誕生地。月曜休館。入館料100円。



奈良街道と分岐する日本の追分。



六地藏石幢



**雲出川を越えて松坂城下へ**

津市南郊の藤方は、もとは藤湯とも書かれた海沿いの湿地で、中世から近世にかけて製塩が行われていました。国道やJRよりやや高台を行く街道沿いには、皇女倭姫命が天照大御神を奉戴したと伝わる元伊勢のひとつ加良比乃神社が鎮まっています。



整った家並みに旧屋号札を掲げる市場庄。街道風情が味わえる。



豪商・小津家の屋敷を修復保存して公開する「松阪商人の館」。月曜休館。入館料200円。



へんば屋のへんば餅は、馬に乗った参宮客がここで馬を返した(返馬)ことに由来する街道の名物餅。



1 / 神都の玄関・宮川は桜の渡で渡河した。かつての渡し跡をJRの線路が跨いでいる。  
2 / 伊勢街道と熊野街道が出合う筋向橋。現在は暗渠になっており、高欄のみが往時の名残をとどめる。  
3 / 外宮北御門の火除橋。旧国鉄参宮線が通じるまでは、こちらが表参道だった。



雲出川を渡ると松阪に入ります。川の兩岸に立つ常夜燈は、北詰が天保五年（1835）、南詰が寛政十二年（1800）のもの。架橋により、現在地へ移設されました。雲出川右岸の町・小野江は、幕末の探検家で、「北海道の名付け親」として知られる松浦武四郎の故郷です。生誕二百年を迎えた今春、伊勢街道に面した誕生地（実家）の一般公開が始まりました。

武四郎は少年期に街道を往来する旅人から各地の話聞き、未知なる世界への好奇心を募らせ、諸国行脚の旅に出ました。当時は未開と言われた蝦夷地（北海道）を六度も探査。数々の出版物でアイヌ文化を紹介しました。旅に生きた巨人のルーツは伊勢街道にあったのです。

奈良街道との分岐点にある月本の追分道標を過ぎ、三渡川を越えて、初瀬街道との追分六軒から市場庄へ。連子格子の家並みが続く市場庄の家々には「くすりや」「ぞうりや」「合羽屋」など昔の屋号が掲げられ、宿場町であった頃をほうふつさせます。

阪内川を越えたら、いよいよ松坂城下。松阪の開祖・蒲生氏郷は、それまで海寄りを通っていた伊勢街道を城下へ引き込み、商業を奨励してのちの豪商を生む基盤をつくりました。松阪商人の館や三井家発祥地などが往時をしのばせています。

### 斎宮から神都・伊勢へ

榑田川を越えると、間もなく明和町です。現代のような架橋技術がなかった時代、

川は通行人にとつて難所でした。榑田川や祓川は、湯水期には仮の板橋を設け、増水期は小舟で向こう岸へ旅人を渡し、それぞれ橋銭・舟銭を徴収していました。

天皇に代わり、神宮に仕えた皇族女性・斎王が暮らした斎宮周辺は、今も古い家並みがよく保たれていて絵になります。

竹神社は、かつて五百人以上が暮らした斎王宮の中心だったと比定される地。斎王制度は飛鳥時代から六十七代、六百六十年以上続きました。

さて街道を歩いてみると、かつての宿場町などで連子格子に瓦屋根の懐かしい家並みに出会いますが、同じように見えて実は大きな違いがあります。

松坂まではほぼ平入りだったのに対し、斎宮あたりから平入りと妻入りが混在しはじめ、小俣町まで来るとほとんどが妻入りに。伊勢の庶民は、神宮の社が平入りなので、神様と同じでは畏れ多いと遠慮して妻入りにしたといわれ、妻入り、切妻が伊勢の民家に普及しました。

宮川は、神都に入るには必ず渡らねばならない伊勢最大の河川です。明治三十年（1897）に鉄道が開通するまでは桜の渡が利用されていました。

筋向橋まで来たら外宮まではあと少し。歩き旅の時代、外宮参拝は北御門から入るのが一般的でした。外宮参拝後は、坂道を登って旧遊郭街古市へ。牛谷坂を下れば、内宮が鎮まる宇治の町です。

気持のよい春の日、古の旅人が辿った伊勢街道を歩いてみてはいかがでしょう。